

高校二年における読書感想文の実態

——長崎県立猶興館高校二年の場合——

大 蔵 陽 子

はじめに

作文指導の重要性が叫ばれ、さまざまな研修会において、作文指導について盛んに講じられている今日、自分の「皆無」と言っているような作文指導の実態を振り返るにつけ、後悔と反省の気持ちでいっぱいになる。

このたびは、心機一転して作文指導を始めるため、その第一歩として、生徒の読書感想文における作文力の実態を見ていきたいと思う。これは、単なる生徒の実態把握というだけではなく、とりもなおさず、自分の「作文指導手抜き」の証明であるということをお胸に刻み、心して見ていきたいと思う。

ここで取り上げられる読書感想文というのは、学校が毎年行う、夏休み読書感想文コンクールの参加作品のことである。この読書感想文コンクールというのは、全校生徒を対象として、日常、まったく読書をしていない生徒たちに、夏休みに一冊でも本を読んでもらおうという目的で、図書館が中心となって行っているものである。課題図書は与えておらず、生徒たちの自由選択に任せており、感想文の長さは、四百字詰め原稿用紙に四、五枚程度と定められている。そして、この中から、国語科だけではなく各教科の先生方を交え、第

一次選考から第四次選考まで行い、それぞれの賞を決定していくのである。

この夏休み読書感想文コンクールについては、その意義・方法において、さまざまな問題を抱えているが、今回はそうしたことに触れず、こうして提出された読書感想文だけに焦点をあてていきたい。

(一) 読書感想文の実態分析

私が担当している二クラスの読書感想文を文章表現力を中心に分析したものが、A表ⅠV/A表ⅡVである。(「書き出しについて」の分類のしかたは、「国語教育研究」第二十五号A広島大学教育学部光葉会刊Vにおける深川賢郎氏の「読書感想文の手びき」を参考にさせていただいた。)

A表ⅠVは、各種学校・大学へ進学する生徒を中心としたBコースの二クラス、A表ⅡVは、就職する生徒たちを中心としたAコースの二クラスのものである。A・B両コースは、ペーパーテストのときは、明らかにBコースの方が成績は良いのだが、読書感想文においては、両コースともあまり差はないようである。文字力面で、いささかBコースの方が誤っている人数が少ないが、その他は変わ

らない。このように、A・B両コースともあまり差がないようなので、ここではまとめて全体的な概観をつかんでおきたいと思う。

。まず第一に、原稿用紙の使い方・句読点の打ち方がわかっていないこと。

。第二に、文字力のなさ。誤字・脱字・仮名遣いの誤りが多い。ここには、わが校の学力の低さがうかがえる。

。第三に、文末における常体と敬体の混用。書き手の感情の変化によって、文末表現が違ってきている。

。第四に、文章構成力の無さ。一文においては、文が少し長くなるとすぐに主語述語のよじれを生じ、二文以上においては、接続詞を使わないため、文と文、段落と段落がつながらなくなり、内容が断片的になることが多い。

。第五に、読書感想文というのは、あらすじを書いて、それに対する自分の意見を書けばよいと思いきや、書いておいて、すなわち、各々の事実についての断片的な感想（＝一次感想）でおわってしまっている。

。第六に、自分の感動を論理的に深めることができないこと。例えば、単に「感激した」「偉いと思った」ということばだけで終わっている。なぜか、というところまで追求していない。

。第七に、読解力が備わっていないこと。浅い読みしかできないから浅い感想しか持てなくなる。

。第八に、推敲・清書の習慣がつけられていないこと。乱雑で汚い文字で、まさに書きなぐったというような感想文が多い。また、前述の表記面での誤りも、この習慣がつけば、明らかに減少するはず

である。

以上のようなことが、A表ⅠV・A表ⅡVから考察できる。ではさらに、具体的に生徒の感想文をあげて、くわしく見ていきたいと思う。

(二) 生徒の感想文の中から

(1) A君の場合

感想文

伊藤左千夫著

。野菊の墓

二年 A男

⁽¹⁾自分は、感想文を書くため、本を読んだことは、ひさしぶりである。ほとんど、感想文を書くにしても、最後の解説を、書いて、すませるといのが、多いので……

⁽²⁾あらすじは、題名を、見て、だれでも暗く、かなしい、本では、ないかなあと、感じると思う。

⁽³⁾その通りで、政夫と民子という、十五才と十七才の従妹が、登場する小説で、ある。

この二人は、とても仲がよく、いつも顔をあわせて、遊んでいる仲だった。

⁽⁴⁾二人は、おたがい、好き合っていた。

⁽⁵⁾でも、従妹という関係から、あまり、いつも二人、いっしょにいるので、親から、ひきはなされ、政夫は、学校へ、民子は嫁に往き二人は、はなればなれになり、

民子は、病氣になり、死んでしまった」

「みんなは、民子が、死ぬまで、政夫の写真と政夫からきた、手紙を、握って、其手を胸へ乗せていながら、死んでいった、民子の姿をみて、二人を、ひきはなしたことを、後悔し、政夫の手によって、民子の好きだった、野菊を、墓の回りに、植えつけて、やった」

「民子は、余儀なき、結婚をして世を去った、という、かなしい話です」

それで、感想としては、

(9) やはり、かなしい小説だ、という印象を、第一に持った。

やはり、いまの現代にも、男女交さい、を、親などが、けん制する、けいこうがある。この政夫と民子の場合も、それで、

男と女が、仲よくしたり、つき合ったり、するのが、自然なのに、反対、それを、けん制したりするのが、不自然だと思ふ。反対に、親たちが、いやらしい考えで、その中へ、ひきずりこんでいるのではないかと、思ふ。そんなことで、ひきはなされた、

政夫と民子は、不幸である。

とくに民子は、それが死につながって、とても、かわいそうに思えて、ならない。

また、政夫は、民子と、別れてから、なんども、民子に、合いに、行こうかと、足をはこんだのだが、民子が、死ぬまで、民子に、合われなかった。政夫は、民子が死んだ、ということ、聞かされて、なんとも、いえない氣持だったと思ふ。

「自分が、そんな、たちば、だったら、自分が、もし、一度でも、いいから民子さんに、合いに、いってれば、もしや、民子さんに

も、はげましの一言でも、かけてやれば、民子さんも、元氣づき、死というものに、おちいらなくても、よかったかもしれない、と思ひ、自分に、腹が立ち、くいが、のこったと思ふ。政夫も、かなしかったに、ちがいない」

そして、政夫は、民子さんの好きだった野菊を、民さんの墓に植えつけて、やった所など、とても、思いやりがあり、民さんを、ほんとうに、思っていたのだなあと、感じられる。

それから、もつとも、民さんに、なみだをながし、すまないと思ふ、氣持ちと、ともにとても後悔しているのは、政夫と、民子を、ひきはなした、病氣の母親だと思ふ。

この人も、かわいそうなひとだと思ふ。

自分のために、民さんは、死んだのだと思っている。この親は、ほんとうに、政夫と民子を、ひきはなしたことを、後悔したに、ちがいないと思ふ。

こんな時、自分だったら、自分も死を、えらぶのではないかと思ふ。そんなことから、その親のくるしい氣持が、なにか、わかるような氣がする。

というわけで、ひさしぶりに、マンガ本、以外の本、小説を、読んだ、感想としては、野菊の墓を、選んで、よかった。

時間があつたら、こおいう、小説を読むように、心がけたい。

このA君の感想文は、原稿用紙の使い方、句読点の打ち方を、まったく無視した文章である。氣分しだいで改行したり、行をあける。

もちろん、改行したとしても、次の文を一段落として書き始めるということは徹底されていない。題及び名前の書き方もおかしい。読点を別ち書きと同じ感覚で使用している。

今まで、多くの生徒の作文を見てきたが、句読点のつけ方、及び、改行のしかたが、これほど乱れているのははじめてである。その他、この感想文における問題点をあげると次のようなことが指摘される。

傍線(1)にはわが校の生徒の読書生活の実態がうかがえる。このA君の他にも、同じ読書感想文においてE君が次のような書き出しをしていた。「まず、どうして日ごろ本を読まない私が本を読むかといえは感想文を書けという夏休みの果^(休)題がでたからだ。でも今日は8月20日だと10日ぐらいいしか時間がない。そこで、本を読むとなれば、うすい100ページぐらいいしかない短本やだれもが知っているありふれた本などしかない。(後略)」

読書感想文コンクールをすることにより生徒に本を読ませるといふことは、「読書」の本末転倒のような気がするが、ここに、そうせざるをえない生徒の実態があるのである。

傍線(2)は、読書感想文を、生徒が書くときの一つの手段である。

「(5)(6)(4)は、文が長いので、主語・述語のねじれを生じている。また、こうした文のねじれは、(1)(3)にも見られる。(4)(6)(7)においては、改行の際の約束が守られていない。(8)(9)(10)(11)(12)(13)は、言葉の重複、不適当な接続詞及び助詞の使用がなされている。また、文章全体が、内容・表現とも幼稚で(波線部注意)、深まりがない。」

このように、この感想文は、内容においても、また、基礎的な表記面においても、高校二年生の文章としてはかなり力不足である。

しかしながら、このA君の良さは、(初)の部分に見られるような素直な向上心を持っていることである。これは、A君に限らず、わが校の感想文においてよく見られる結びであり、このことは、地方の高校生らしい素朴さ、素直さのあらわれだと思ふ。この素朴さ、素直さは今後もたいせつにしていきたい。

(四) B君の場合

母をたずねてをよんで、二年、B男「マルコはイタリアのゼノアという町に住んでいました。その町はたいへんまずしい町で、父、母がいくらはたらいでもお金をかせぐことができませんでした。それというのも父が仕事に失敗したからでした。それだから母はお金をかせぐためにアルゼンチンのブエノスアイレスにはたらきに行きました。」

「日本では父がいくのが普通なのでたよりなきをかんじた。それにしても母をいかにせるなんて父はなんてたよりないんだろうと思ふ。また、はたらきにいくのならばあんなにたよりないアルゼンチンにいかなくてもちかくのスイスとかフランスにいけばよかったのではな

いかと思つた。」

「母はブエノスアイレスでいっしょうけんめいはたらいた。はじめのうちは手紙がきてかりていたお金もほとんどかえしてしまいました。しかしそれから手紙がこなくなつた。いろいろしてみたがたよりがこなかった。とうとうイタリアのりょうじかんに「母をさがしてく

れ」という手紙をだしたがみつからなかった。マルコは母が死んだんではないかとかなしくなりました。

あるばんマルコはけっしんした。それは母をさがしに行くことです。それを父にうちあけると父はびっくりしました。しかしマルコの決心にまげゆるしました。「マルコはたいへんゆうきがあると思います。ほんとうにえらい。マルコはまだ13さいです。ぼくだったらいまでもいかないと思う」

「四月のあるはれたばんに出発しました。船には多勢の人間がのっていたがだれもしている人はいなく、つらいことやくるしいことをがんばろうと思ってもやっぱり心ほそかった。しかしたいへんしんせつでやさしいおじいさんがいた。そのおじいさんはたいへんやさしくしんせつにしてくれた。

ゼノアをたつて三週間がすぎた。あと何日かすれば会うことができるとたのしみにして船の生活をした。マルコはあと何日かであると思いたいへんうれしがっているすがわかりました。そして五月のなかばの朝ブエノスアイレスについた。むねをはずませておりましたと思ひます。おじいさんともわかればりきつておじいさんの住んでいる町を見つめました。しかしおじいさんはパイアブランカというところににげていきまもなく死んだと聞かされびっくりしました。けれどもマルコは氣をとりなおし母が働らいていた家ならわかるかもしれないと思ひたすねてみた。そしたら母はコルドバにいったときいてがっかりしました。「ここでマルコはなげださないで臨機応変に考えるところはたいへんかんしんした。」ここからコルドバまでは何千キロもあるがしんせつな人ばかりあってコルドバまで無事ついで

た。

コルドバの町で母の働らいてる家をさがした。働らいている家はメキーネスという名まえだった。さがしまわってようやくみつけたが三ヶ月まえにツクマンにひっこしたときいてまたがっかりした。ツクマンはここから八百キロもはなれておるときいて絶望した。しかしまた運よくツクマンに行くことができました。だがツクマンにつくまでがたいへんくろうしました。それは火をおこしたり、うしやうまにたべものをはこんだりランプをそうじしたりしていそがしくはたらいした。またきがあらくなつた男たちから仕事がおそいとなぐたりけられたりした。ここでもマルコはゆうきがあった。

そのころ母は病氣でねていました。マルコはツクマンにつきメキーネスの家をさがした。しかしまたこの町にもいませんでした。でもここから二、三十キロぐらいの町ときいて希望をつないだ。一日かかって母のいる家にとつた。ようやく母にあうことができた。「この本をよんで親子の愛情の強さがよくわかりました。そしてマルコの母への愛情と、困難と苦勞とに対する勇氣と忍耐のつよさをたいへん感動しました。」

A君が別ち書きと同様に読点を打っていたのに対し、B君の文章は、まったく読点が打たれていない。この点、A君と同様B君も、句読点の打ち方を正確につかんでいない。また、高校二年にしては、多くの稚劣さを持つてゐる。もし、この作文を小学生が書いたものと言つても、何の違和感も読む人は持たないであろう。

その原因の一つに本の選び方があげられる。「母をたすねて」と

いう物語がつまらないというのではない。この本はこの本なりにすばらしいが、やはり、高校生の夏休み読書感想文を書く図書として、適当か否か吟味するべきであろう。

この本選びの問題は、B君のみならず、わが校の生徒全員にも言えることである。参考までに、A表ⅠV・A表ⅡVの「とりあげた本」という欄を見ていただきたい。課題図書を指定していなかったため、各自で自由に選んでいるが、はたして、読書感想文を書くのに適切な本か。前述のE君のような考えで本を選んだ者もかなりいると思われる。

また、稚劣さを感じさせる原因として、他には、文章表現（特に、ひらがな中心の文章、常体、敬体の混用、言いまわしの幼稚さ）があげられる。しかし、何といても、感想に深味がないことが、一番稚拙な原因であろう。

B君の感想文の形式に注目してみると、事実―感想、事実―感想のパターンである。これは、前述したように事実についてありのままの感想を述べる一次感想なのである。本来ならば、本を読み深めることにより、多面的な洞察力がつき、感想も二次・三次と深まらなくてはいけないのに、この一次感想でストップしてしまっている。これでは、読みの浅さが感じられるのも当然である。

この一次感想だけの感想文というのは、B君だけではなく、わが校の生徒たちの中にはこうした感想文を書く者が多い。私が、A表ⅠV・A表ⅡVにおいて、「感想が断片的で考えに深みがない」という気づきを書いているのは、すべて、このB君のパターンと同じ感想文なのである。

(三) C女さんの場合

「友情」を読んで

二年 C女

私は高校になって知り会った友だちの中で一人、自分にとって親友と呼んでいいんだろうと思う友だちが、出できました。

その人になら何でも心から話し合っ、自分の今思っている事、未来など話す事が出ます。

でも、時々けんかすると、友情って何だろうと思います。

自分の好きな友人の心がわからないのに、さも友人のこと全部を知っているようなそぶりをする自分、それが友情なのだろうか。

今までの程度のことまではわかっていたのに、あることで友人が信じられなくなった自分。

親友は独占するためにあるのだろうか。

などと、友情について考えている時、この「友情」という本が目についたので読んでみようと思いました。

ここに出て来る野島と大宮との友情について、大宮のほうは小説を読んでも、何かにつけて、野島よりはいつもほめられていた。

この事は野島を時に淋しくさせる。

しかし大宮との友情はそれで傷つけられるわけではなかった。

私は、お互に尊敬していたからだと思います。

特に大宮が野島に対する心くばりは、私を特に感心させました。

野島がやがて、杉子というとても滑らかで、美しい少女を恋するようになり、その心を大宮に説々と語る。

大宮は、心の中で前から杉子を好きなのに、野島の話聞いて、野

島と杉子が結ばれるように、自分のあわい恋心は捨てて、友のためにつくす。

私は、大宮は野島のためになぜこれほどまで、自分を捨てて、野島につくさなければならぬのだろうか。

こんなに自分を捨てて、友人のためにつくすのが本当の友情なんだからって感動しました。

でも、自分がそんな立場にならたらどうだろうか、結果が突らぬ恋に終わろうと友情を捨てたかもしれない。

私が最も悲惨だなんて思った所は別荘での事です。

野島が杉子さんに夢中になっている姿をいたましく大宮は思い知らされる。

しかし杉子の心がだんだん大宮は自分のほうに傾むいている事に気づき、西洋へ行く決意までする。

そして西洋に行き杉子さんからの手紙で自分を杉子が熱烈に恋している事を知ってもなおかつ、野島を愛してくれと手紙を返す。

なぜそんなに友のことばかり思うのだろうか。

人間は不完全だ。

神ではない。

もっと自分の心になおになればいいのに、どこまでつぼまっているの、自分をどこまで犠牲にするのですか。

あなたは人間じゃないもって人間らしく生きたらどうなの、と大宮に叫んでやりたいと思いました。

やはり杉子のたび重なる熱烈な愛の手紙には勝てず、大宮は野島との友情を捨てる決心をし、野島にわかれの手紙を出した。

でも私は、野島と大宮はいつかきくと二人の道はちがっていても笑って会える日が来ると思っています。

友情って何だろう。

私この本を読んで感じたことは、真の友情とは、お互いを解放しあうって尊敬しあい、お互いに思いやることじゃないだろうかと思いをしました。

また恋についても、人間は理想的にできていたものではない。激しく恋すれば恋するほど、どんな小さな事でも許し難いほど、苦痛に感じるものなのだと思います。

いろんな友情の形があり、恋の形もいろんなものがある。それぞれをどううまく、自分の人生の中に役立てて行くかが問題だと思えます。

私もこれからいろんな友を持ち、人間関係を作って行くでしょうけれど、大宮のように、バカになって友を思うことができるようになりたいと思います。

このC女さんの感想文も、他の感想文と同様、文章表現上のさまざまな問題を抱えている。句読点のうち方、文末表現の不徹底さ、原稿用紙の使い方、誤字・脱字など、前述したA・B両君と互角である。しかし、ここで、C女さんが、A・B両君と大きく違っている点は、感想の内容が、いわゆる一次感想から第二次的な感想へ深まっているという点である。「友情」というテーマをまず自分なりに考え、そして、作品の主人公たちの友情について考え、最終的には、それらをもとにしながら、自分にとって友情とは何かということ

とをまとめている。原文を理解・把握し、それを生かして自分なりの友情論を提起する。ここまでくると、二次感想文的なものから脱して、ずいぶん高校生らしい文章になってくる。ただし、彼女の場合も、基礎的な文章表現力がまったくないので、今後、その方向での指導も必要であろう。

(四) D 女さんの場合

「父と子」バザロフの考え方について

二年 D 女

人は皆、それぞれに生きていく上で、大なり小なりそれぞれの考え方を持って生きていくと思う。それ故にまた、すれ違い、衝突しあって生きている。そんな人間の姿をめぐりに描き上げたのが、このツルゲーネフの「父と子」ではないだろうか。

この「父と子」がひととき光るのは、ここにバザロフという登場人物があるからだと思う。

ツルゲーネフがこの長編小説で生んだバザロフは、ニヒリスドつまり虚無主義者である。一切を否定してしまつたところから始まるとする否定主義者である。彼は芸術を認めようとせず、自然の偉大さを賛美するものに冷笑し、愛情すら否定してしまふ唯物論を持つ。彼に言わせると、愛情などというものは、絵空事でカビの生えた美学にすぎないのだ。が、しかし、彼はその絵空事であるはずの恋愛に傷つき、年老いた両親を愛しながら、一言もそれを告げることなくチフスに感染し、死んでゆくのである。

自然科学だけが必要で、人間らしい感情すら認めようとしない唯物論者であつたはずの彼は、その人間らしい感情によつて苦しめら

れることになった。オジンツォワという一人の女性に対する気持ち、彼自身、どうすることもできなかったのだ。人間の感情というものは、果たして唯物論でかたづけられる程単純なものなのだろうか。

彼の考え方はあまりに哀しすぎると思う。「我々は有益と認めるものために行動している。」とかつて彼は言った。しかし、いたい人間にとって有益なものとはいへない何なのか。くだらぬといふなら、人間そのものも、私たちが生きていくことすらも、実にくだらぬことになるのではないか。しかし、そのくだらぬ中で、私たちは生きている。一生懸命にあくせくしながら生きているのだ。

私は人間というものを、なぜがあなたかいと想う。それはたぶん、人間が愚かさや醜さを背負いこんでいるからだ。彼がいうように、私たちの生きることで一部は、私たちがいなくなつて、そしていないであろう永遠に比べたら無に等しい。にもかかわらず、その中で必死に何かを求めて生きている私たちは、確かに馬鹿げている。けれど、だからこそ、私は人間というものにどうしようもなく温かさを、優しさを感ずるのである。

私たちはみな、毎日毎日、つまらぬことを気に病み、つまらぬことに喜びながら生きている。それを私はすばらしいと思う。そんなものであるからこそ生きてゆくことができるのだと思う。人間から愚かさを取り上げたら何が残るだろうか。バザロフは、死の間際「死」を否定した。けれど、人間の無意味さの価値までも認めないならば、私は「生」さえ否定せざるを得ないのではないかと想う。

このようにバザエロフ批判をしている私であるが、かといって、バザエロフが全く好感を持ってない人物であつたかという点決してそうではないのだ。なぜなら彼もまた、同じ弱く無力な人間の中のひとりであつたからだ。自分の信念をかたくに信じていきがっている人間のひとりにはすぎなかつたのだ。父から子へ、そしてまた父から子へと限りなく続く生命と時の連続。その中で、その永遠と比べるなら一点にすぎない時の中で、彼は彼自身のドラマを展開したひとりの、無意味、な人間でしかなかつたのだ。彼は人間らしい感情を嘲笑しながら、やはり、愚かな両親を愛し、一人の女性に心を乱し、死を怖がりながら、ドラマに幕を降ろしてしまうのである。私は、実は彼こそ、誰よりも人間らしい感情を持った人間であつたのではないかと思う。彼が冷たい唯物論を主張するのは裏腹に、彼は、あたたかさと言ふと、そして愚かさを持つていふように感じる。

次から次へと続く生命の連続の中で、一個の人間の存在は、まったく無力であり、愚かであり弱いものだ。しかし、その愚かさを、弱さを背負つて、人間は、文学を、美術を、科学を築きあげてきた。とるに足らないようなくだらぬことをいぢいち氣にかけるのも人間だが、土星の、大氣まで研究するのも人間である。

人間というものは、実に複雑な生き物のように私には思える。これほど複雑な人間の感情は、もっと複雑なのではないかと思う。そんな人間の感情でも唯物論で解き明かすことができるのかどうか、私にはわからない。唯物論も、立派な学問のひとつなのかもしれない。ただ、それによつて、芸術や、愛情や、自然の偉大さまで否定

してしまつて良いのだろうか。彼がいうそのくだらぬものこそ、これまで、人間たちを、愚かな人間たちを支えてきたものではないか、と私には思えるのであるが。

A・B君がわが校の感想文において、底辺あたりに位置し、C女さんが中程度に位置するならば、D女さんは、本校のトップグループに位置する。

D女さんの感想文を読むと、救われたような気持ちがある。「自分で考える」ということを放棄し、すぐに結論に到達しようとして、他人の考えを丸写ししたり、曖昧な言葉でごまかしたり、という感想文が多い中で、彼女の考察態度はすばらしい。文章のうまさもさることながら、彼女の感想の源にあるものがすばらしい。彼女は、「人間への愛着」、そして「生きること」をテーマとしていのである。「読書」とは生きる糧である。人間について、生きることにについて、考えることができな本ならば、いったい何の価値があるであろう。逆に、本を読んで、自分の生きざまについて何ら考えることもできないというのは、何と悲しいあわれなことであらう。

D女は、そうした力を誰の指導も受けずに自分一人で培つてきた。こうしたD女の才能をつぶすことなく、今後、育てていかねばと思う。

おわりに

以上、昭和五十四年度夏休み読書感想文を中心に、猶興館高校二

年生における読書感想文の実態をみてきた。その結果、本校の生徒たちには、基礎的な表記力及び文章表現力が不足していることがあげられる。また、内容面においては、一次感想から二次、三次感想へと深まっていけないという点が明らかになった。

これら二つの結果はいったい何を表わすか。前述したように、この結果は、明らかに、「無指導の証明」なのである。今まで毎年、読書感想文コンクールに伴う、作文活動はやっていたが、教師の作文指導は、行なわれていなかったのである。今後、この実態をどのように受けとめ、そして指導していくか、今後の私の課題である。怠慢から、やっと目がさめたようである。

(長崎県立猶興館高等学校教諭)